さくら第494号
令和 3年 2月

さくら

発行所　さくらそろばん
発行者　平瀬重雄
春江町境 17-7：TEL51-1337
hirase@mx2. fctv. ne. jp

『1週間は日曜日から土曜日まで』

1週間は7日あり1日は24時間です。カレンダーは日曜日から始まり月曜日、火曜日、水曜日、木曜日、金曜日、土曜日と進みます。

いつ頃からこのような並び方になり曜日の名前が決められたのでしょうか。日本だけの表し方なのか、世界の国々ではどのように決められているのでしょうか。気になります。

7日を1週間とする暦(こよみ)を使い始めたのは古代メソポタミアの人々だといいます。メソポタミアでは月の満ち欠けを基準に28日～30日をひと月としていましたが、やがてひと月では長いので4つに区切り、7日をひとまとまりとする「**週**」を使い始めたといいます。

新月⇒上弦⇒満月⇒下弦という節目の形が週の由来ともいわれます。

近くで誕生したユダヤ教の旧約聖書では「神は7日で世界を創造された」といいます。江戸時代の元和8年(1622)に京都の毛利重能(もうりしげよし)が書いた最古のそろばんの書物で現在も残っている「**割算書・わりざんしょ**」の最初のところに次のように書かれています。

神は一日目に昼と夜をつくり、二日目に天と水、三日目に陸と海と草と木、四日目には太陽と月と星、五日目に魚と鳥、六日目に動物と人をつくり、七日目には休んだ。この日を祝って休日としたとあります。

メソポタミアで発明された「週」が紀元前のエジプトに持ち込まれます。エジプトでは「**占星術**・せんせいじゅつ」がとても発達しており、宇宙を見て広大さ、不可思議さを感じ天空で太陽や月、星の動きに神秘的な力を認め、それによって現世のあらゆる事がなされていると信じました。星の運行や天体現象から国家や社会、個人の運命を占います。

その後、近代の天文学によって衰退しましたが今でも星占いとして残っています。

エジプトでは星と地球との距離が、土星→木星→火星→太陽→金星→水星→月の順で遠いとされており、それぞれの惑星が地球から遠い順に24時間のうちの1時間ずつを支配していると考えました。

24時間を7日で割ると3余るから、一つ目の惑星は3つずつズレていき、これを7日間にわたって当てはめたとき、月、火星、水星、木星、金星、土星、太陽の順になります。

1日を24時間に分けるのは紀元前1400年ころのエジプトから始まったともいい、エジプトでは10日を単位とする独自の週が別にあったといいます。

日本には中国の唐へ渡った弘法大師が持ち帰った「**宿曜経・すくようきょう**」などの密教教典によって平安時代の初めに伝えられ、朝廷が発行する漢字だけで書かれた「**具中暦。ぐちゅうれき**」には曜日が書かれ干支、二十四節気、七十二候が記載されていました。藤原道長が書いた「御堂関白日記・みどうかんぱくにっき」は国宝になっており奈良時代からこの具中暦に日記を書く習慣ができたといいます。

平安時代から江戸時代まで日曜日は「**密**」と呼ばれており、語源はソグド語の日曜日を意味する「ミール」からといいます。

古代バビロニアで誕生した1週間は7日間という単位が紀元前のエジプトに伝わり、ユダヤ教やキリスト教の「神は六日間で世界をつくりあげ、七日目を休息日としたので、日曜日が週の始め」とする考え方が合わさり、「日曜・月曜・火曜・水曜・木曜・金曜・土曜」の順番になったのです。

ちなみに中国では、日曜日を星期天といい月曜は星期一、火曜が星期二、水曜を星期三、木曜は星期四、金曜は星期五、土曜を星期六と言います。